



石原慎太郎翁①

「アメリカって国は好きで嫌いだからね。学ぶ所も沢山有るけど兎に角66年間、敗戦を終戦と自分でレトリック(巧言)してさ、良好な日米関係って名目で、どれだけ

1年7月22日、石原慎太郎氏は都知事会見で持論を披瀝(ひれき)します。

「僕は若い時に『待ち伏せ』って小説を書いたんだ。ヴェトナム戦争のアウトポスト(前哨地)での非常に怖い思いの体験記だ。その時に絶対には勝てないと思つたね、この戦争にアメリカは」。

2003年、ジョージ・W・ブッシュ率いるアメリカ主体「有志連合」は「イラクの自由作戦」を掲げて軍事介入するも「大量破壊兵器」発見には至らず、サッダーム・フセイン処刑後も戦闘続行するも、バラク・オバマ政権で引き続き国防長官のロバート・ゲーツがイラク側の治安部隊訓練に重点を移す「新しい夜明け作戦」への方針転換を発表。2011年末にイラクから完全撤退。その半年前の会見で石原翁は預言(よげん)しています。

アメリカの妾(めかけ)として収奪(しゆく)されてきたか。『閉(め)ざされた言語空間 占領軍の検閲と戦後日本』で江藤淳が大事な告発をしている。

東日本大震災4ヶ月後の2011

人社会キリスト教圏は絶対に勝てない。しかしイスラムが勝つかと言つたら、それも私は言えない。しかし白人が勝てない事は確かだ。そうなる世界は均衡(きんけう)はどういう風に乱れていくか。

更に6年前の2005年7月10日、72歳の石原氏と49歳の僕はフジテレビ『報道2001』で80分間の対論を行います。米ソ間で埋没(ぼく)した勝ちな欧州の存在感を高め、盟主(めいしゅ)たらんと指導力を発揮したシヤルル・ド・ゴール。その偉業に学び、米中の狭間に浮遊(うきう)する日本を日本たらしめ得る政治家は翻(ひるがえ)つて一体、何処(どこ)に居るのかと。

彼はサミュエル・ハンティントン『文明の衝突』も援用(えんよう)しながら「日本はアメちゃんだけを頼りにしたら、とてもじゃないけど立つていけないよ」と看破(かんぱ)。

世界各地での戦争・紛争こそが最大の公共事業と嘯(うそ)くアメリカの所業(しよげ)に対する曰(いわ)く言い難(がた)き日本国民の戸惑(とまど)いを、「嫌米(けんまい)」なる惹句(せいきう)で湾岸戦争時に表現した僕は、相方(さうぼう)が歩むべき道を見失っている時には「親米(しんまい)・反米(はんまい)」「屈米(くつまい)・嫌米(けんまい)」の不毛(ぶぼう)な二項(にきやう)対立(たいりつ)を超えて臆(おそ)せず諫言(かんげん)し助言(すけご)する「諫米(かんまい)」の

心(こころ)智(ち)を持ち合わせてこそ、富国裕民(ふこくよじん)の国民益(こくみんえき)を日本(にっぽん)に齎(たも)すと思(おも)いました。

「なぜ、知事になったのですか」と両者に問う記事の「朝日新聞」掲載は翌(翌)2006年4月10日。

「国会にいたんじゃ、何も出来なから」と答えた彼は、「まあ東京ならね、総理大臣と違つて色々な事が出来るだろうと思つた」と眩(くら)き、「国(くに)が動かないなら、こつちが先にやってやる」と決め台詞(だいご)を吐(つ)きます。自らを「オバちゃん感覚(かんかく)なの」と語る僕は、「より社会貢献(こけん)出来る場所だと思つたから」と答えています。相手が望んでいる事は何なのかを的確(とくかく)に捉(とら)え、迅速(じゆんすん)な決断(けつだん)と行動(こうどう)が求められる行政(ぎやうせい)こそは、プロフェッショナルなヴォランティア精神(せいしん)なのだ。

「四半世紀(よんはんせいき)を隔(へ)てて若者(わかもの)像(ざう)を小説(せうせつ)で切り取つた目立ちたがり屋(や)の二人(ふたり)が奇(あ)しくも知事(ちじ)の座(ざ)にあり、分権(ぶんけん)が進む時代の住民意識(じゆんみんいしき)の変化(へんか)を映(うつ)し出す存在(そんざい)として自分の言葉(ことば)で政治(せいざ)を語り、旧来型(きうらいがた)の価値観(かちかん)も手法(ていぽう)も押し潰(つぶ)してきた」と締(ひ)める記事(きじ)とは裏腹(うらむち)に、石原翁(いしはらのおきな)をしても実現(じつげん)不可能(ふかふか)だった「横田空域(よこたのくういき)」のニッポン返還(へんげん)。次号(じぎ)に続(つ)きます。

★次号11月号の発行日は11月1日(金)です。